

## 日本語という遥かな〈ふるさと〉をめざして —ミレーナ＝美智子・フラツシャル『ぼくとネクタイさん』

関 口 裕 昭

今世紀に入ったあたりから、ドイツ語圏の文学、とりわけオーストリア文学において、日本を舞台とした小説が陸続と発表されている。そこでは伝統的な日本文化のみならず、現代のポップカルチャーがイロニーを込めて描かれ、オキナワやフクシマがその問題をはらむ歴史とともに重要なトピクスとなっている。数か月から半年ほど日本に滞在したオーストリアの作家たちは、各地を旅した経験をもとにこうした小説を書いている。素材の調査にも余念がない。おそらく、これらの作品がひとまとめに新しい「ジャポニズム」という観点から考察される日も、近い将来来るのではないだろうか。

しかし私の読書体験からみると、「ジャポネズリー」（表面的な日本趣味）を抜け切れていない作品も少なくない。日本はいまだエキゾチックな存在であり、二つの文化の間に横たわる径庭が十分に埋められているとは言い難い。

そんな中であって、ミレーナさん（個人的にも親しいので、こう呼ばせていただく）の小説は独特の位置を占めている。日本人の血が流れている彼女の作品では、日本が近い、魂の故郷として描かれている。チェコ系オーストリア人の父と、岡山出身の日本人の母とのあいだにザンクト・ペルテンに生まれ育った彼女の第一言語はドイツ語である。しかし、「母語」はそれでも日本語なのだ。つまり、彼女が生まれて最初に、母から口伝えに教わった言語は日本語である。身のまわりのもので、たとえば、公園でチュンチュンと鳴いている小さな鳥を、「これがすずめよ」というように母から日本語を教わったのだ（このエピソードは『ぼくとネクタイさん』にも描かれている）。同じように育った兄とも、初めは日本語で話していた。しかし幼稚園、小学校に進むにつれ、ドイツ語が日本語の地位にとって代わり、日本語は次第に意識の下の方に追いやられていく。

2017年にノーベル賞を受賞したカズオ・イシグロは、5歳まで過ごした日本での記憶を保存するために、小説を書き始めたと述懐している。ミレーナさんの場合も、似たことが言えるかもしれない。しかし彼女は日本に長く住んだ経験がない。毎年のように来日しているが、滞在期間は長くて一か月くらいだという。したがって日本の記憶は、母から聞いた話や書物から得た情報など、間接的なレベルにとどまっている。しかしだからと言って、日本への憧憬が強まることはあれ、弱まることはない。彼女は言葉を通して内なる日本を取り戻そうとする。そうした切なる思いは、カズオ・イシグロよりも強いかもしれない。

今回訳した『ぼくとネクタイさん ( 原題 *Ich nannte ihn Krawatte* )』は日本のとある都会を舞台にしており、登場人物もすべて日本人である。主人公タグチ・ヒロは、ひきこもりになって2年ほどになる青年である。ある日、勇気を奮って、両親が留守中に近くの公園に出てみて、ベンチに座り、自分の前に座っていた中年のサラリーマン、オオハラ・テツと出会う。最初はただ会釈するだけだったが、何度も顔を合わすうちに親しく言葉を交わすようになり、この奇妙な友情が二人の人生を大きく変えていくことになる。

ある意味でこれは、最近の日本によくあるひきこもり小説のひとつに数えることもできる。ところが、日本を舞台にしながらも、どこにこの公園があるのかさっぱりわからないのである。

現代ドイツ美術界を代表するゲアハルト・リヒターに、写真をもとに描かれた一連の肖像画や風景画がある。しかし、本物の写真のように描かれていながら、細部は巧みにぼかされていて、見る者は確かな輪郭をつかむことができない。ミレーナさんの小説の登場人物や風景についても同じことが言える。舞台となる公園はどこにでもありそうだが、どこにもない不思議な場所である。それは懐かしい母胎のような空間でもある ( 作中で、公園に来ていたある母親が、「もう帰るよ」と「故郷に向かって叫んでいるかのように」子供に呼びかける )。この懐かしさは、ヒロやテツ、そしてヒロの友人のクマモトや、幼なじみのユキコ、テツの奥さんキョウコにも当てはまる。

この小説は114の短い断章から構成されている。その一篇一篇が、すぐれた散文詩のように強い印象を読者に残す。語り手も次々に代わる。ヒロの内的独白に始まるが、そのうちテツが語り手となり、二人の回想の中で先にあげた人物たちが、実に生き生きと動き出す。原文ではIchとなっている人称を、「ぼく」「わたし」「あたし」「おれ」などと訳し分けねばならなかった。誰が話しているかという判別は時には難しかったが、それぞれの登場人物に合わせて訳し分けることは楽しくもあった。

本書にはときおり、日本人に関わる安易な発想も姿を見せる。テツが、のちに奥さんとなるキョウコとお見合いをするシーンや、ヒロの幼なじみユキコの、半世紀ほど前までは時おり見られた、差別と極貧の生活を描くシーンなどがそうである。このような古めかしい、現実とはかけ離れたイメージが本書のひとつ弱点となっていることは認めざるを得ない。

しかし丁寧に読めば、こうした紋切り型のイメージの背景にも、日本人への愛着の念が込められている。キョウコはアメリカのジャズ歌手ビリー・ホリデイのI'm a Fool to Want You が大好きである。その歌詞の一部 To want a love that can't be true. はライトモチーフのように、作中に何度も繰り返される。「けっして実ること

のない恋を求めて」などと訳されているようだが、ネット上で試聴してみると、ホリテイの声と容姿がキョウコのモデルとなっているように思われ、それが今はない、古いタイプの肝っ玉母さんのようで、ますます親しみが湧いてきた。



本書には印象深いさまざまな絵画やポスターも登場するが、記者の問いにミレーナさんと、ウィーンのカフェ・ヴァイマルで対して、ミレーナさんは、その都度、参照した写真を教えてくれたので、確かなイメージをもとに訳出することが出来た。たとえば、あるポスターに写った裸の女性を、ein Knäuel と言い換えた箇所があり、理解に苦しんだが、ミレーナさんがイメージの原型になった手足を絡ませたヌード写真を提示してくれたおかげで「手足を身体に巻きつけた、女性のヌード」と訳すことができた。

翻訳は思いのほか難航した。大部分は素直なドイツ語で書かれており、初め通読したとき、内容がスツと頭の中に入ってきただけに、翻訳とのギャップの大きさに驚かされた。平明なのに意外に奥が深いのだ。凝縮された詩的な表現の中に、ときおり物語の核心が描かれている。たとえば最後のシーンで、久しぶりに夕飯の席についたヒロと対峙する父の心情が、微動だにしない<sup>くるぶし</sup>踝に反映され、Verräterische Unbewegtheit. と表される。このたった二語からなる文をどう訳すべきか。私は頭を抱えてしまった。「暴露している不動さ」などと直訳しても、だれが理解してくれるだろう。

ちなみに白い踝は、ヒロと父と一緒に海に行った際にも、父の内面を反映した重要な身体部分としてすでに登場していた。踝はその形態からのどぼとけを連想させる。のどぼとけは言葉と密接に関わり合っている。英訳を覗くと、Revealing immobility. とあり、単語の置き換えに過ぎなかった。このように英訳は単語を置き換えただけの場合が多く、あまり参考にならなかった。思い切ってミレーナさんにこの部分を尋ねると、「それは動かない。でもかえって動きを表しているのです。動かないことは、彼がこの数年間感じた心の苦しみを表すと同時に、また一緒に夕食の席につけたという感動をも表しているのです」という丁寧な返事があった。そこで私は「動かないことが、父の心の動きを物語っていた」と訳した。もっとふさわしい表現があったかもしれないが、少なくとも直訳よりは正解に近づけたのではないか。

こうしたさりげない表現の中に、ドイツ語的な部分と、日本語的な志向性がせめぎあっているように私には思える。私の深読みかもしれないが、ひきこもりのヒ

ロがテツとの出会いによって言葉を回復し、堰を切ったように自分の過去を語り始めるくだりは、作者がヒロに乗り移って日本語的感性を獲得し、新たな言語を紡ぎ出しているように思えた。そばで彼を励まし、話を聞いているテツは、作者が無意識のうちでもとめた父性的な存在、母語ならぬ父語的なものではなからうか。

硬質なドイツ語の奥の方で、ふるさとのように繊細な日本語的感性が脈打っており、私は驚きの目でそれを発見しながら訳し続けた。そうした意味で、私にとって新しい体験であると同時に、どこか心の奥底に忘れかけていた故郷を感じさせるような、懐かしさを感じる仕事でもあった。

(明治大学教授)